

佐久間景は操者である

偽 魔装機神 ~A bystander of the
Brave~

某アークス(三鯖民)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは選ばれた無垢なる少女たちの物語ではない。

世界を守るために立ち向かう勇者たちの物語でもない。

——これは勇者を助けようと戦い、そしていなくなった、誰も知らない戦士の物語である。

きつと、結末は収束する。だけど、その過程はそうとは限らない——。

お願い

オリ主の描写がメインである為、ある程度原作を知った上でお読み下さい。

目次

第一話 『にねんまえ』	1
第二話 『さくまけい 上』	10

第一話 『にねんまえ』

「ああー！今日も一日、楽しかったなー！」

「ゆーゆはご機嫌だねー、見てるこっちも元気をもらえるよー」

「そのつちの言う通り、流石は友奈ちゃんね」

「あははー、照れるなー」

恐らく学校からの帰り道なのだろう、中学生と思わしき少女三人が笑いあいながら歩いている。

「でもでも、明日からはもつと楽しいかもだよ？なぜなら？

明日からは、三！連！休！」

「イエーイ！そして今日は東郷さん家にお泊りだー！」

友奈と呼ばれた少女——結城友奈と、やたらハイテンションな少女——乃木園子はハイタッチをする。

「うふふ、二人とも上機嫌ね」

「ふふーん…おわつと?!」

突然、強い風が吹く。

「うわあ、びつくりしちゃった…すごい風だったね」

「…風かあ」

「そのつち？」

「いやあ、なんだか思い出しちゃってさ…あの日の事」

突然懐かしむような、そして悲しそうな目で空を見上げる園子。

その様子を見て、もう一人の少女——東郷美森も空を見上げ思い

出す。

—— かけがえなき友と、共に戦った「戦士」が「いなくなつた」あの日の事を。

二年前、まだ東郷美森が鷺尾須美で、勇者システムに精霊が実装されておらず、バーテックスの撃退で精一杯だった頃。
『それ』は何の前触れもなく現れ、何の前触れもなく去っていった。

初めて『それ』と出会った、2度目のお役目の時のことを二人は今でも鮮烈に覚えている。

「あの日も、さつきみたいにしし風が強い日だったわ。…あの時は、お役目のために頑張らないと、って意気込み過ぎてたの、今でも覚えてるわ」

「あの時のわっしー、本当に真面目さんだったよねー」

「ちよつとそのつち…まるで今の私が不真面目みたいに言わないで頂戴」

「えへへー、ごめーん」

「昔の東郷さんかあ…あ、それでそれで？」

東郷の自室で、友奈は2人から昔話（…といっても2年前の話ではあるが）を聞いていた。

佐久間景は操者である 第一話 『にねんまえ』

「くっ…!!!」

「わー?!」

神樹館小学校に通う三人の少女が、人類を滅ぼさんとする敵「バーテックス」から世界を守る「勇者」に選ばれ、初めてのお役目から半月が経ち、2度目のバーテックス…リブラ・バーテックスが襲来。

リブラ・バーテックスはかなりの高度を維持しているため須美の矢も途中で勢いを失い届かず、リブラが回転することによって巻き起る暴風によって近づく事も敵わず悶着状態。

(くっそー……ここらでアタシが突っ込まないと勝てそうにない……！)

そんな中赤い戦衣に身を包んだ勇者の一人——「三ノ輪銀」は一人突撃してこの状況を打破しようと考えていた。

「こんのお……いい加減に——!？」

啖呵を切って踏み出そうとした時、彼女たち勇者の上を「何か」が通り去った。

「なんだっ?!」

思わず空を見上げる銀。

須美も、矢を番えながら上空へと視線を向ける。

そこにいたのは——

「——巨人?」

まるで翼の生えた西洋甲冑のような、白い巨人だった。

その巨人は須美たちを見ようとせず、ただ一直線にバーテックスの元へ向かう。

「うおっ?!…なんだアイツ?!」

「新手…なのかしら?」

「でもでもー、大橋の向こう側からじゃなくて、神樹様のいた方角からびゅーんって来たよねー?」

紫の戦衣に身を包んだ少女、乃木園子が「不思議だねー」と呟く。確かに敵であるならば、この戦場——瀬戸大橋に創り出されている結界、「樹海」の向こう側…四国の外側から現れる筈である。

そう彼女たちが話しているうちに、白い巨人はバーテックスに近づく。

「…ん？そーういやなんでアレ近づけてるんだ？」

巨人を追いかけられるような形で三人が前に進むなか、銀が気付く。勢いが収まったとはいえ、今だあのバーテックスは回転運動によって風を発生させ続けている。

しかし巨人はその強風をもともせず突き進んでいる。

いや、よく見れば…巨人の周りだけ風が無くなっている。

「…二人とも、見て！あの巨人の周り…風が無くなっている…いや、相殺されているわ！」

須美の指摘通りだった。巨人はあの暴風に対し、どういう理屈か同じ強さの風を纏い相殺している。

「なんだそりゃあ!？」

「ええく?!魔法みたーい！」

驚く銀と、その隣で無邪気に目を輝かせる園子。

そうしているうちに巨人はバーテックスの目の前へ。

地面に着地し、勢いを殺すように足で大地を踏みしめブレーキをかけながら、巨人はまるで居合斬りをするかのように腰に何も持っていない手を据える。

その据えられた左手に、緑色の魔法陣が創り出される。そこから持ち手のようなパーツが現れ、巨人は右手でそれを掴み引き抜く。

すると、まるで見えない鞘に入っていたかのように両刃の剣が魔法陣から現れた。

剣を引き抜き、構える巨人。

そしてそのままバーテックスに突貫する。

『!!』

すれ違い様、一閃。

腕のようにぶら下がっていた部分が切れ、その先にぶら下がっていた分銅のようなモノが地面に落ちる。

当然、それを振り回すことによつて発生していた風も徐々に勢いを無くし、最終的に強風ではなく、普段通りのそよ風になる。

「…今ならやれる!」

「よし!なんだかよく分かんないけど形勢逆転!」
「のりこめ」

それに乗じて距離を詰めていた勇者三人が、今までの仕返しとばかり

りに攻撃する。

「おりゃああああ!!!」

一番に銀が突っ込み、得物である巨大な手斧で何度も斬りつける。

「それー!!」

「…そこー!」

一方園子は胴体部分へ。

須美は顔のような形の部分へ矢を射る。

怒涛の勢いの連続攻撃。

それに押し戻されるように、バーテックスは徐々にその姿を虚ろにし、消えていく。

そして結界の中に、花吹雪が吹き荒れる。

「な…何とか、倒せた…!!」

ぜえぜえ、と肩で息をする銀。

「もう、へろへろく…」

「…けれど、問題がまだ残っているわ…!!」

三人の目線は、謎の巨人に向く。

『……………』

三人の視線を受けてもなお、巨人は無言を貫く。

『
』
「ん？今なんて……ってうお?!」

何か言葉のようなモノを発した巨人はそのまま大きく空に飛翔し、凄まじいスピードでその場を後にした。

「……なんだよもう！お疲れの一言くらいあつてもいいじゃんかー！」

「わー、すごい速いねー。もう見えなくなっちゃったー」

「……あの白武者、いったい何者なのかしら。大赦が作った新しい兵器？」

「でもでもー、そしたら私達にも事前に教えてくれるよねー？」

「サプライズって奴じゃないか？」

そんな暢気な会話を交わしているうちに、樹海化が解けていく。

——空には、心地よい風が吹いていた。

「絶対に、覆してやる。優しくて強い、あの子が死ぬ未来なんて……!」

空に飛び去った巨人の中、一人の青年が操縦桿を強く握りしめていたのを、彼女たちは知らない。

第二話 『さくまけい 上』

「では、話してくれるか？君の事を」
「…その前に、一つ聞かせてください。…あの子は、どうなるんですか」

取調室のような部屋。

机をはさみ対面する2人の男。

一人は壮年の男。

もう一人は、治療を受けた後なのか全身のいたるところを包帯で覆った茶髪の青年。

「今彼女の治療を行っている。…少なくとも俺達は、彼女を盾に君に無理難題を突きつけるつもりはない」

壁にもたれかかっている紫髪の男が、包帯の青年の質問に答える。

「…話せる範囲でいい。君と彼女の身に何が起きたか、話してはくれないか？」

壮年の男が、正面に座る茶髪の青年に言葉をかける。

「……分かりました。俺の知ってる範囲でなら全部話します」
「すまないな、助かる」

「…俺がアレを見つけたのは、確かアイツと特訓やってた頃くらいだった…と思います」

そうして彼は回想する。

——自らの運命を大きく狂わせた、あの「巨人」との出会いを。

——佐久間景は操者である 第二話 『さくまけい
上』

「——はい、やめ。ありがとうございました」

「ありがとうございますましたっ！……だあー！つかれたあ……」

剣道場のような広い施設。

そこで少女が一人の青年と木刀を使った訓練を終え、休憩に入っていた様だった。

「毎回…思うんだけど…佐久間さんの訓練…ハードすぎ……！」

「おいおい、これくらいで音を上げてるようじゃでっかい化け物には勝てんぞー」

綺麗に磨かれた板張りの床の上に、大の字になって寝っ転がる少女。

その少女に「佐久間さん」と呼ばれた男は、笑いながら木刀を所定の位置と思わしき場所：無造作に竹刀や木刀が入れられた竹刀立てにしまつていく。

そして竹刀立ての近くに置いてあるペットボトルを二つ取り、一つを少女：三ノ輪銀の額に当てる。

「あー…冷たくて気持ちいいー…」

「まあとりあえずお疲れ。いくら疲れていても水はしつかりとるんだぞ」

はい、と生返事を返しながらペットボトルを受け取る銀を見ながら、男：佐久間景は座り込む。

彼は、一言で言えば「大赦から派遣された教官」だった。

勇者に選ばれたとはいえ、彼女たちはついこの間まで戦いとは無縁だった少女。そんな彼女たち勇者に敵を屠る刃の握り方を教え、生き残る術を授ける。

それが今、景に与えられた「お役目」だった。

「そう言えば佐久間さんって、バーテックスと戦ったことあんの？」
「ある訳ねーでしょうが。俺ただ剣術の腕がいいからって理由で派遣されたんだからね？」

「え、そうなの?!…てつきり戦ったことがあるから教官になつてくれたのかと思つてた」

だがそんな役目選ばれた彼自身、分からないことだらけだった。

本人の宣告通り、彼はバーテックスと戦った事はない。ただ西暦の時代から連綿と受け継がれてきた剣術道場の跡取りだったことが、彼の大抜擢の理由の一つだった。

「大赦も難題を押し付けるもんだ……『未知の敵と戦うためにありつたけの剣技詰め込め』って、最初聞いた時アホかと思つた」

「いや、アタシも今『アホか』って思つた」

「……だよな？これ俺がおかしい訳じゃないよね？」

うーん……と唸る二人。

「………考えても仕方ないな」

「そつすね」

そう言つて立ち上がり、体を動かし特訓の続きを始める銀と景。

——景が選ばれたのは、『これ』も理由の一つだった。

事前の調査で、突撃能力の高さと、単純明快な思考を持つと評価された銀。彼女に短期間で戦技を授けるには、彼女が理解しやすい指導をしてくれる相手でなければならぬ。

故に、「彼女によく似た思考回路を持つ人物」でなければならぬかつた。

そして彼自身、私生活でも銀と関わりを持つ人間……幼少期から知り合いであることも抜擢に拍車をかけた。

どれくらい長い付き合いかと言うと。

「元氣な嬢ちゃんだな……名前は何？」

「あたしみのあぎん！さんさい！」

「みのあ……みのわ……あ、三ノ輪さんちのか！」

「うん！おにーさんは？」

「俺は佐久間景、ご近所さんってやつだ。よろしくな、銀の字！」
「よろしくー！」

とまあ、こんな出会いがあつたのかなかつたとか。

ともあれ組織の冷たい合理的な判断が、巡り巡って近所付き合いのある二人を引き合わせたのは奇跡だつた。

そのあと、しばらくまた竹刀で打ち合いを続け、結局2人がそれぞれ
の帰路に就いたのは夜の帳が落ち始める頃合いだつた。

「はい、今日の訓練終わり！」

「ありがとうございます！」

「きちんと汗の始末するんだぞー」

「はーい」

駆け足で帰っていく銀を見送った後、鍵を閉めて自分も帰る景。

「……………だー、つつかれたあ……………銀の字はガッツあふれて羨ましいぜ
……………」

大通りから離れ少し暗い、田んぼが広がる道の中を竹刀入れを担ぎ
ながらひとり歩く。

——その時だつた。

「……………？」

風が吹いた。そして、『自分を呼ぶ声』を聞いた。辺りを見渡す。しかし周りには自分一人。

どうしてか、その声を無視できなかつた。

……何か、今の自分が劇的に変わる出来事が起こる。そんな予感がして、つい好奇心に身を任せてしまった。

「はあ…はあ…ッ!!」

石で組まれた階段を、一心不乱に登る。

気付けば自分を呼ぶ声に従って、呆然と歩いていった。

偶然にもその方向は自分の家……山奥に構える道場のような屋敷の近くにあった、洞窟に足を運んでいた。

暗い洞窟を、明かりもつけずんと進んでいく景。

知らない場所なら危険だが、ここは彼が幼少のころから何度も探検と称し訪れた洞窟。

もはや自分の庭とも言い切れるくらいに歩き慣れている場所なので、大した危険もなく進んでいた。

(確か…この奥は水たまりで…)

彼の記憶が確かなら、この奥には下手な池より深い水たまりがあるはずだ。

そして、その水たまりへとたどり着く。

「…あれ、光ってる?」

水面が、ぼんやりと輝いていた。

水底から、何かが迫ってくる。でも、不思議と怖くはない。

そして「それ」が、とうとう姿を現す。

「……なんつだこりゃあ……!!」

一言でいうなら、それは騎士だった。

白い甲冑の様なフォルム、手には両刃の剣。

背中には巨大な翼のようなパーツ。

頭部には、赤い宝石を中心に三方向に分かれた角。

「で……っけえし……かっけえ……!!」

まるで古い昔の…「西暦」の時代のロボットアニメに出てくるような、無骨ながらカツコイイデザイン巨人。

未知の存在である「それ」に対し、抱いたのは恐怖ではなく、男心に響く「かっこよさ」だった。

そしてその巨人が腕を差し伸べる。

「…乗れって事か?」

巨人は答えない。

「……よっこいせ、っと」

だがそんな様子を気にも留めず、ささつと手の上に乗り込む景。

緩やかながらも前に向かって尖っている胸部装甲が開く。

中にはシートが一つと、丸い操縦桿。

「…座っていいんだよな?」

巨人は何も言わず、頷く。

「……失礼しまーす」

今更恐る恐る、断りを入れて座る景。

彼が座ったと同時に開いていた装甲が閉じられ、コクピットは密閉される。

「うおっ」

しかし同時に周囲の状況が映し出され、まるで自分が巨大化したかのような錯覚を受ける。

「すっげえ……今俺ロボットに乗ってるんだ…!!」

ついつい童心に帰ってしまう景。

彼が興奮する中、コンソールに文字が映し出される。

<Confirmation of passenger……:St
art sphere Drive Aptitude surv
ey……>

「……なんだ、この文字…英語って奴か…?」

瞬間、脳に電気が走ったような衝撃が景を襲う。

言葉を上げる余裕すらなかった。

そして膨大な量の知識が、無差別に景の頭に押し込まれていく。

まるで自分の中身が全部混ぜられているような錯覚すら感じる。

「うっ……うおっ……うえ……!?!」

意識が遠のく。

だがそんな中、情報の中に引つかかるものを感じた。

「う……げほっ……い、まのはあ……!」

何かの光景か。

ぼんやりとしていたが人影が一人、巨大なモノ三つに向かって立ち向かうビジョンが一瞬見えた。

「ふう……はあ……はあ……なんなんだ……こいつ……?!」

その疑問に答える者は、その場にはいなかった。